

かせかけ

編集 沖縄県立看護大学
 広報・情報委員会
 発行 平成14年7月31日



緑が萌ゆる我が学び舎

目次	
• 連続公開講座	2
• 海外出張記	3
• シリーズ教育・研究分野の紹介	
保健体育	4
病理学	5
母性保健看護	6
• 教員紹介(よこがお)	
比嘉 良充 教授	7
伊藤 幸子 教授	8
• 第4回看大祭	10
• 教職員の動き	12

かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。総とは紡いだ糸を巻く道具で、総掛けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。沖縄県立看護大学は、国際的視野に立つ看護職者の育成をめざしています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ布を織って綺麗な着物に仕立てていく、その一途の心と地道にして洗練された「技術」・「感性」・「情熱」そして優しさは、「知識」の継承・創出とともに、本学の看護職者を生み育てる教育・研究の原点に相通ずるものであらうと、広報誌の名称にしました。



かせと枠

連続公開講座

『平成13年度連続公開講座について』

研究・研修委員会委員 宮城 政也

本学にとって第1回目となる連続公開講座は、「健やかに老いる」をテーマに、昨年10月3日より本年2月6日までの第2水曜日を中心に行われた。

第1回目は千葉大学より野口美和子教授（現自治医科大学，本学非常勤講師）をお招きして「老いと健康」についてご講義いただいた。野口先生は、安心立命、死ぬまで七転び八起き（生涯発達）、人として生きるなど日常生活との関わりを中心に受講生のイメージしやすい内容の講義でかなりの好評であった。第2回目の宮城航一先生（本学教授）は「健やかに限界寿命を全うするために」というテーマで、世界のデータと沖縄県を比較検討しながら長寿や生活習慣病に関する総合的なお話を先生独特の語り口で説明いただき、受講生のうなづく場面が数多く見受けられた。第3回目は、筆者による「ゆっくり老いるための運動」をテーマに運動実践を行い、久しぶりの運動に受講生の息は上がりつつも、手前味噌ながら和やかに行われたのではないかと考えている。第4回目は、琉球大学より上江洲榮子教授（本学非常勤講師）をお招きして「生活習慣病予防のための食事」について沖縄の伝統食文化を栄養学的視点による科学的解説、特にヒージャー汁（山羊汁）の話には、受講生もくぎ付けであった。第5回目は、本学の當山富士子教授による「健康づくりと生きがいづくり」をテーマに農村過疎地域に生活をする高齢者の生き方についての事例報告等を中心に受講生に具体的かつ分かりや

すいお話を頂いた。

第6回目は、本講座の締めくくりとしてのシンポジウムを仲宗根正先生（北部保健所所長）、岸本政浩さん（本講座受講生代表）、本学の大湾明美講師をパネリストとして「健やかに老いるために：保健、看護、福祉の立場から」をテーマに、それぞれの立場からお話しいただき、その後フロアを含めた自由闊達な意見交換が行われ、会場の盛り上がりは良好であった。

最後に、本講座は、最終的な受講生の評価においても概ね好評であった。しかし、受講生の中には、「1回1回のつながりが悪い」「もっと実践的で分かり易く」といった意見も聞かれたことから、これらの指摘を熟慮しつつ、次回については尚いっその内容検討の必要があるう事を記して報告とする。



平成13年10月3日 野口美和子教授(千葉大学)
「老いと健康」

参加者の声

・各講座とも大変有意義で、よい勉強になりました。

- ・野口先生の講義は、先生の研究成果が随所にあり、新しい情報として役立ちます。
- ・運動は、実践的で家庭でも可能で大変良かったです。
- ・公開講座のPRをもっと一般的にやってほしいと思います。今回は友人の誘いで参加しました。
- ・講師の先生方の話す内容や受講者の質問も楽しく、和気藹々と参加できました。

海

外

出

張

記



ICM大会に参加して

講師 玉城 清子

第26回国際助産婦連盟(ICM)大会が4月14日から18日まで、オーストリアのウィーンで開かれ、世界中から2,500人の助産師が集まり、“midwives and women together for the family of the world(世界の家族のために助産師と女性が力をあわせて)”のテーマで多くの研究発表がありました。私もポスターセッションでの発表を通して、大会に参加しましたので、その模様を報告したいと思います。

開会式に先立ち、由緒あるセント・ステファン寺院で大会の成功を祈るミサが行われました。開会式は民族衣装に身を包んだICM加盟の各国あるいは各団体代表者の入場に始まり、その後関係者の挨拶がありました。翌日からの研究発表では、大小さまざまな会場で約700題ありました。その中から特に興味があった2題を報告したいと思います。“The Midwife as Role Model(役割モデルとしての助産師)”はイギリスのBliff R.の研究です。臨床場面での助産師の役割モデルについてはまだ研究がなされていないとのことで、グラウンデッド・セオリーを用いて研究を行い、その結果、助産師学生にとっては専門的判断や主体的実践がロールモデルとなっていることがわかったということでした。“A Review of the Model of Midwifery Care in Ontario, Canada - Seven Years Following Regulation of the Profession”は、カナダ助産師協会のLynch B.らによる研究です。

オンタリオ(カナダ)では助産師は7年前に専門職として法的に認められ、7年間を振り返る目的で、助産実践モデルや障害等に関するアンケート調査が行われ、専門職として直面している点が明確にされ、挑戦方

法が明らかになったと報告していました。

私は日本の助産師の需給調査をポスターで発表しました。50歳代と思われる北欧の助産師が、日本の助産師の需給状況について説明を求めてきました。発表内容のように、需要は多いが供給は少なく、現在60歳以上が多数を占めている彼女らが引退をするとさらに助産師不足が懸念されると説明しました。北欧の助産師は現在彼女の国では助産師は少ないが、彼女達がリタイヤするころには日本と同様の問題がおきてくるであろうと話していました。

学術集会の発表者や座長などから、オーストラリアやアフリカや北米などの助産師のバイタリティーを感じました。アフリカでは母子保健の問題は大きく、助産師は重要な役割を持っていると感じました。カナダ、アメリカ、オーストラリアでは助産師は比較的新しい職業であり、専門職として確立していく過程の力強さを感じました。

ICMの期間中、ウィーン市内のバースセンターを訪ねました。外観は民家風で、内部もアメニティア、水中出産用バスが備わっていました。妊婦の診察を終了した助産師にいろいろ話を聞くことができました。オーストラリアでは出産は助産師の立ち会いが必要と法律で決まっており、助産師は専門職として認識しているとのことでした。案内役の医師も、助産師が優秀だから減多に異常産はないと話しておりました。

ICM大会ではさまざまな国の研究発表や、バースセンター見学により多くの学びがありました。



学会会場前にて

シリーズ 教育・研究分野の紹介

基本科目 保健体育

講師 宮城 政也



和気藹々と語り合う宮城先生と学生達

大学教育における保健体育の位置づけは学部改組、教養不要論とともに変遷し、さら1980年代後半より明確なビジョンを打ち出す必要性に迫られてきた。つまりそれは、メリットばかりが強調されてきた運動、スポーツに対して、我々のような立場の専門家ですら、「人間にとってなぜ身体を動かすことが必要なのか」についての本質を真剣に考えてこなかった経緯があったように思われる。

現代人は急速な時代の流れに、自らが身体エネルギーを消費するための環境を破壊し、自己家畜化現象を引き起こしていることに対してあまりにも無関心である。

また、私達が生きている、そして成長するということについての一面は、多種多様な刺激に対する適応の結果であると考えることができる。

現在の学生は、PCの普及とともに膨大な情報が溢れる中、多くの刺激とともに生活をし、その適応の結果としてある種の人間的成長は早急なのかもしれない。しかし、このような現象は同時に多くの情報刺激を受けることと、身体に対する刺激減少(身体活動量減少)との間のギャップをますます大きくするものとなり、そのことも昨今の様々な社会問題に関与しているのではないかと考えてしまうのは私だけではあるまい。

このようなことから鑑みると、必然的に人間の本来あるべきライフスタイルとは何か?そして、そのことを追求しつつ、そのインバランスな状態を改善することに寄与していくことが私の教育目標の一つとなるの

だろうと考えている。そのためには、多くの学生が、社会環境からの様々な情報を正確に取捨選択する能力を身につけてはじめて成り立つということが前提であることは私の講義においても例外ではない。

加えて、現代社会においていくら情報が溢れ、価値観が多様化しようとも、人は人との関わりの中で成長していく、つまり人とのコミュニケーションは大きく成長を遂げる可能性を持つ学生にとって最も重要である。保健、実技を通して強調することは、多くの異なる意見、視点の存在をなるべく多く提示し、そのことを必ずいったん受容(容認ではない)できる。そして自らの持ちうる知的情報を駆使して意思表示をする。また、実技においては、人間の動きの可能性を考え、「身体を動かす」ことに対する意味づけを意識(自らに対する気付き)することを実践する。このようなことを講義の中で実行するのは容易ではないが、常に身体で感じることは心へ一般化されるとの信念とともに講義を行うしかないと考えている今日この頃である。



研究のテーマ

- ①児童生徒のメンタルヘルスに関すること
..... (学校保健関連)
- ②児童生徒の体力と心理的要因について
..... (科学研究費・共同:基盤C2002~2004)
- ③低周波電気刺激の心理的側面に与える影響
..... (企業研究費:2001~2002)
- ④競技スポーツ選手のメンタルマネジメントについて.....
(県スポーツ医科学委員会及び沖縄応用スポーツ心理学研究会)

シリーズ 教育・研究分野の紹介

専門基礎科目 **病理学**



教授 宮城 航一



宮城教授研究室にて学生と熱く語る

保健看護学では、医学は専門支持科目に位置づけられている。一般的に本学の講義名と対応させると、医学は以下の図のような構成となっていると理解する。今井教授の科目、私の科目は、基本科目の生物、化学、栄養学に接続している。

将来は、人体構造・機能演習を二分し「病態生理・疾病学演習」を独立させる構想を持っている。

学生は、私の講義ではじめて臨床医学に接するが、ここ三年の医学の進歩と臨床から離れた今の私のギャップをどのように埋めた講義ができるかに腐心している。看護大学に限らないかも知れないが、担当する教科を実践する場（例えば医学部の附属病院など）を持たぬ大学人が「哲学」を除いて実在的な講義を行うことは不可能で、我々はその領域の「解説者」に過ぎない存在である。「知的偏重」や「知識の切売り」を批判するが、ここ何年も臨床をしていない教官が、臨床医学や臨床看護を教育しているのが、看護大学である。つまり、対象から最も離れた所に居て、アンケート、本や文献から学んだ事を得々と解説するしかできない実状がある。

このような事態にもかかわらず、私は「学

生への教育的責任」を果たすべく、どれだけ臨床に肉迫する講義ができるかを絶えず意識しながら講義してきた。具体的には、本来の専門である脳神経外科学会以外に、プライマリケア学会、臨床成人病学会などに入会して、本年度4月1日には日本プライマリケア学会認定医の資格も取得した。また、古巣の琉球大学脳神経外科での早朝カンファレンスと総回診に参加して、少なくとも知識の面で退行しないように心がけている。にも関わらず、解説者としてしか講義できない限界に変わりはない。

私は、病態、疾病について十分な知識を欠落させた全人的医療、全人的看護はナンセンスで、これについては十分な理解なしに行われる看護は恐ろしいものがあるという視点で講義している。私の講義を看護にどう展開するかは、看護師を目指す学生自身の課題である。

私の研究分野は、悪性グリオーマの集学的治療、疾病の分子生物学、遺伝子療法の基礎的研究、プライマリケア医学、健康スポーツ医学に関する研究である。病態生理と疾病学で鍛えた学生と卒研で再び切磋琢磨し合える事を楽しみにしている。

基礎医学	正常人についての医学 (解剖学・生理学・生化学・薬理学) 今井教授が生態機能学、人体構造学、薬理学で講義	病的状態の基礎医学 (病理学・感染症) 宮城が病態生理・疾病学で講義	社会医学 (公衆衛生・法医学)
臨床医学	内科、外科、耳鼻科、整形外科、脳外科、眼科、麻酔科、放射線医学などの臨床医学は宮城が病態生理・疾病学・老年医学で講義	産婦人科、小児科は疾病学Ⅲで非常勤講師(医師)が講義	精神科 非常勤講師(医師)

シリーズ 教育・研究分野の紹介



専門科目 母性保健看護

開学して4年目を迎え、本年より助産の教育が始まり慌ただしく過ごしながら、生き生き活動をしている。現在、6名の教員がいるが、それぞれ育ってきた過程は異なるが目的を共にする仲間とあって、お互いに学びあい研究も進めている。本大学の母性保健看護、および助産学の教育をどのようにしていくのがよいか目下脱線しないレールを引いている途上である。さて、そこで各自で自己紹介をしましょう。

加藤です。教務部長という職責もあり、教職員にいろいろお任せなどという面があり何時も申し訳なく思っております。研究は従来から諸外国における助産婦の活動について調査、出産時の痛み測定、また、共同研究として「助産所における安全で快適な妊娠・出産環境の確保に関する研究」（厚生科学研究）などの一員として研究を続けております。助産の教室は数年前フィンランドで見た看護教室に少しでも近づけたような気がします。学生が良い環境でよい学びをしてもらえるようにしたいと日々考えております。今後、学生と共に思春期の性教育をピア・カウンセリングの学習を通して活動、地域に還元していきたいと思っております。

東京への往復は、体力も必要だということを実感しております。音楽を聴いたり絵画を見たりしてゆっくり過ごしてみたいと思っております。

園生です。10年ぶりの沖縄ですが顔見知りの方々も多く、楽しく仕事が出来そうです。助産コースの講義も始まり、水を得た魚の気分。沖縄のお母さん方の“より良いお産”を支える、出産教育と出産現場の改革につながる研究に取り組むたいと考えています。

玉城です。今年は大学の教員になってから3年目です。それまでは看護師の資格のある成人した学生に助産教育を行っていましたので、着任時の1年目は20歳前後の若い2年次に「母性保健看護方法」をどうすれば理解してもらえるか考え、そして悩み、全力投球しました。2年目は講義の他に、国際交流委員会のメンバーとして初めての海外研修の準備、引率、報告書作りに全力投球しました。3年目の今年は、私にとっては大学における初めての助産教育をInquired Based Learningという教授法を取り入れ、実践しているところです。毎年新しい仕事があり、研究もできていませんでしたが、今年こそは沖縄県に多い若年者の妊娠・出産・育児に焦点をあてた研究をスタートさせたいと思っています。

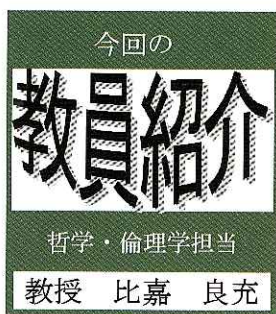
賀数です。8月からの助産実習が楽しみです。出産の喜びを分かち合える実習ができるようにと考えています。よりよい助産ケアをめざし、日々奮闘中です。沖縄の低出生体重児の出生予防に関する研究を継続しています。

西平です。「空をさわりたい」といっていた娘も今年からピカピカの一年生。娘の子育てを通して「父性はどのように発達していくのだろうか？」ということに興味を持ち、親性発達の過程についての研究が課題です。

井上です。2歳児と忙しい夫を抱え、日々悪戦苦闘しながら働いています。ヘンリー先生の影響を受けて、看護ケアの質の評価に興味を持ち、母乳育児ケアに関する質の評価の研究をやろうと考えています。



母性保健看護メンバー勢揃い
左から西平・賀数・園生・加藤・玉城・井上



『一冊の本との出会い』

男四人女三人の兄弟姉妹の三男として私は台湾で生まれた。父は、結婚後すぐ沖縄から台湾に渡り、エンジニアとして日本企業の製糖工場で働いた。彼は、大変な読書家で書斎の本棚には何百冊もの本が整然と並んで置かれてあり、時々、私が本を取り出してみると、所どころに傍線や書き込みなどがあつたことを今でも鮮明に憶えている。もうひとつ浮かんでくる子どもの頃の父の思い出は、毎週日曜日になると男の子四人を本屋巡りに連れていってくれたことである。私たち兄弟は、本屋の床の上にべったり座って、読みたい本を自由に読み耽った。

その頃、父は私たち四人の男の子供たちの将来の教育計画を描いていた。その計画では、長男は医者、次男は農学者、三男(私)は弁護士、四男は生物学者となるはずであった。しかし、この父の雄大な「子育て計画」は、日本の敗戦と台湾から日本人全員が引き揚げなければならぬ現実を迎え頓挫することになる。台湾から沖縄に引き揚げてきた私たち一家は、住民を巻き込んだ激しい地上戦を体験して廃虚と化した故郷の惨憺たる状況と米軍支配の現実を見せつけられて絶望した。しかし、この不安と絶望が渦巻く中で、父の最大の悩みは子供たちの将来の教育問題だったようである。

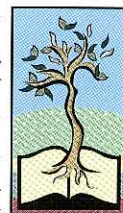
ところが、状況は一変した。当時の琉球政府が人材育成を目的とした第1回の「国費留学」制度の募集があり、長男兄(敗戦時台北帝国大学2年次在学)が応募して、めでたく試験に合格し、東京工業大学への編入学が決定した。驚いたことに、彼は、父の期待を裏切

り医学への道を拒否して化学専攻に進路変更を勇断した。東京へ出発の日、名護町(当時)主催の壮行会には町民多数が名護大通りに集まって彼の大学進学を祝して見送った。その時、大勢の町民に混じって高校生の私もいた。多くの人々に激励されて旅立って行く兄を誇りに思うと同時に、大学へ進学することがこんなに重要な意味があるのであれば、俺も必ず大学は進学すると決意した。

それから数ヶ月後、兄から小包が届いた。急いで、小包をあけると中から岩波文庫の小さな古本が1冊現れた。『死に至る病』という書名を見たとき私は何か異様なものを感じた。著者はコペンハーゲンに住むセーレン・キェルケゴールであった。早速、本を開くとはじめにこう書かれてあつた。

「人間とは精神である。精神とは何であるか？精神とは自己である。自己とは何であるか？自己とは自己自身に関係するところの関係である。すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものなることが含まれている。—それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するということである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然との、総合である。」

当時、17歳だった私には、正直言って、キェルケゴールの冒頭の文章は彼の哲学の肝心な部分のようであるが、その意味するところがよく理解できなかつた。当時の本を取り出してみると、所どころに傍線や書き込みなどがあつて懐かしい気がする。その後、折にふれ、月夜の晩など、きれいな名護湾の波打ち際を歩きながら、キェルケゴールの冒頭の言葉を暗唱して、少しでも彼を理解しようと思いつめて夜をすごした。そして、再読を重ねていくうちに、何か釈然としないものを感じながらも、なんとかこの本を読み終え、死に至



るとは、自分はいったい何になるかということに関係する。哲学の言葉で言えば、存在と生成ということであり、人間が生きていることの営みはこのふたつのことから成り立っていることに気づいた。すなわち、人生とは絶望と不安にほかならない、とキェルケゴールは言っているのだと理解した。絶望という死病のあらゆる現象形態を分析して、その診断を示し、治療への道を示唆した

点で、この本は、私を絶望と虚無の状態から「脱出」する道を示してくれた貴重な一冊の本となったのである。

キェルケゴールの『死に至る病』との出会いで、私は父の期待を裏切って弁護士の道を断念し、大学で「哲学」を専攻することを決意したのである。今頃、父はどこかで息子を狂わせたこの一冊の本を恨んでいることであろう。



今回の
教員紹介
成人保健看護 担当
教授 伊藤 幸子



『近況雑感』

わたしと沖縄、全く夢想だにしなかった出会いである。いま、現実にごうして沖縄に暮している。われながらふと不思議の感に打たれる。思い起こせば・・・というほど遠くの日のことではない、ついこの間のことのように思えるのだが4、5年前の私は山口県立大学看護学部にて在任し、いまと同じように成人看護を担当していたところに、沖縄県からお二人の使者（その内のお一人は仲里幸子教授）が見えられ、平成11年4月に開学するという沖縄県立看護大学への就任を請われたのがこの始まりだった。世の中一般では、後進に道を譲る年嵩になるのに、なお新しい任地を与えていただける幸運を無にしては罰当たりになると思えば、きっぱりお断りもならず、定年後のご奉仕になれば幸いと、他は何も考えず安請け合い(?)してしまっただ次第。

幸運というのは、周知のように18歳人口推移が減少に傾斜し多くの有名大学さえ入

学生獲得に頭を悩ますご時勢にも拘わらず、いま看護界では4年制看護基礎教育課程を設置する大学、学部、学科の新設ラッシュのため、看護職教員が総動員される時代を生きていることである。「かせかけ」創刊号で仲里教授が記されているように、「看護専門職の大学教育」は戦後の看護改革において掲げられた目標であり、半世紀を経た今日、ようやく達成されつつある。敗戦後の新生日本における教育制度改革において、医師、歯科医師、薬剤師、獣医師養成のための大学教育制度は当然のごとく施行されたが、看護職の大学教育についてはGHQ公衆衛生局看護課の強力な進言が占領統治下の厚生省になされたにも拘らず、実現するところとならず、主たる教育養成機関は看護学校レベルに止まったのである。とはいえ、今日までの日本の医療保健の一端を担い、国民の健康を守り、人々への看護を実践し、また看護の後継者教育を立派に支えてきたのは、制度が立ち後れたため大学教育を受けられなかった多くの先輩看護職たちによることを忘れてはならない。

ところで、同じく先の「かせかけ」で今井教授が述べておられるように、どうせなら6年制の専門職教育課程であるべきだという見解は、これまでの看護教育の来し方を知るものとしてはあ



まりにも飛躍した発想と思えたのであるが、現時点に立って考えてみるならば、領けることであり少数精鋭対象の大学院構想よりも将来に有益な明察かもしれないと思う。

だが、本学もいまや大学院開設の課題に向って、全教職員の総力を結集せねばならぬ時ではある。それにしても、一つの難題は文部科学省や大学基準協会の認める基準を満たし、かつ本格的看護専門教育を委ねられる教員人材の不足状況である。ところで、沖縄本島では、琉球政府下の昭和44年(1969年)4月から琉球大学保健学部において4年制看護基礎教育課程が設置されて、48年3月以降毎年その課程を修了し、看護職に就くことのできる学部卒業生が25年間以上輩出されてきたことは、他所に比べたら大いに有利ではあるまいか(蛇足ながら、看護系大学協議会名簿によると、琉大の課程設置は本土復帰年の1972年5月となっている)。

誰もが知っているように、昭和27年4月に高知女子大学家政学部に日本で最初の4年制看護基礎教育課程が発足した。1年遅れて、同28年4月に東京大学医学部に、そして3つ目は11年後の昭和39年4月に聖路加看護大学に設置(短大を改制)された。同43年には名古屋保健衛生大学(現藤田保健衛生大学)衛生学部と国立琉大に4,5番目の課程が設置された。因みに6番目を付け加えるならば、千葉大学看護学部看護学科の開設であり、昭和50年4月のことであつた。なお、此の時点には徳島、熊本、弘前、千葉の4国立大学教育学部に特別教科看護教員養成課程(高等学校衛生看護科で准看護教育をする)が存立していた。終戦以降、そしてもう戦後ではないと言われた時代になつても、国も医学・医療界も、医師の養成課題にのみ力を傾けるだけで、看護専門職養成について何ら考慮しなかつた。先駆的だつた東大医学部にいたっては、衛生

看護学科を昭和40年度に保健学科に改組したが、もつとも貴重だつた看護専門教育は片隅に追いやつてしまつたのである。他の先発の課程は看護教育を続行し、大学院課程も設置し、相当数の卒業生が輩出されてきたと思うが、女子教育であることから、どれだけの卒業生修了生が看護職キャリアを続けたかが問題である。いま数にして100近くになる看護学部課程、そして40近くの大学院課程があるが、それらが必要とする看護職教員数をいまだ供給し得ないという事態がその結果を物語る。

沖縄では先に述べたように、琉大保健学科卒の有看護資格の人材プールが存在することは有望な条件である。すべてが沖縄に留まつておられないにしても、多くの卒業生が県内のあちこちの組織で活躍しておられることであろう。現にこのOPCNにおいても、主要な構成員をなしている。21世紀直前に生まれたOPCNだが、これまでのとりわけ医学者教師の多大な影響力を受けてきた過去の看護教育から成長脱皮をはかり、医学のレベルに優るとも劣ることなく、保健医療において医学との両輪となりうる看護独自の理念および学術科学を教授し研究し、且つ現場の看護実践の向上に寄与する大学を目指したいものである。卒業生たちの看護実践能力が沖縄県民の心からの信頼信任を獲得できるものとなり、やがてその看護実績が、沖縄特選の保養地の名声と共に全国的に有名になり、県外からも多くの転地療養者、老後の余生を送りたい人、健康を求めるひとびとが集つて来る・・・そんな保健県・沖縄とOPCNの未来の姿を引退間近の一看護教員は空想する。(平成14年7月記)

Okinawa
Prefectural
College Of Nursing



第4回 看大祭

自分の体を知ろう
血圧を正確に測るには…坊やも興味津津。



アルコールパッチテスト
あなたは飲める派？飲めない派？ 確かめてみませんか？
多くの人がテストを受けました。

出店でにぎわう渡り廊下



【是非、わがコーナーにお越しください！】
歩く宣伝マン出現



なんちゃって筋々番付
体育館でストレス発散を。



サークル活動を通して

4年 富田 みずの

皆さんこんにちは、サークル『音楽集団』の部長をしている富田です。サークル結成して既に1年が過ぎました。結成した当初は初心者のみ、ギター・キーボードのみの小さなサークルで、一曲を仕上げる度にたくさんの困難がありました。今では個性的で愉快的な新メンバーと楽器が加わり音域や表現力に甘さと辛さが出てきました。看大祭の後夜祭ではメンバー全員が舞台上に立ち、緊張と興奮という名の快感を味わえたのではないでしょう

か。今後私達『音楽集団』は、新境地への挑戦として活動拠点を学内に限らず、地域へと、はたまた全国へと展開し、そして技術面では、前人未踏の組み合わせとしてダンス&バンド、略して『ダンバン』にチャレンジしていく次第です。いつかどこかで皆さんと一緒にダンバンを踊りたいと思います。

最後に、ドラムセット購入にあたり協力して下さった学生の皆様、事務の方々、先生方また、後夜祭の機材類やステージセッティングを全面的に協力していただいた琉球大学生の皆様、そしてマネジメントに携わり協力して下さった学生会他関係者の方々、大変有難うございました。



まつり OPCN



もんじゃやき

慣れた手つきで天井のはだか電球もそれらしい雰囲気を出している。



島の研究
教員による出展離島・過疎地域支援事業コーナー



あなたの体力年齢は？
足先で数字を書いて腹筋力を測る。



思春期相談
あなたの悩みに答えます！

ハワイの？
参加者によるハワイの再現。



看大祭を終えて

第4回看大祭実行委員会

委員長 高良 明友美

今年の看大祭は、念願であった全学年揃っての初めての開催となりました。第4回看大祭実行委員会では、学生一人ひとりの自主性や主体性に重きを置き、この看大祭の場が学生にとって、日頃の大学生活では出せない能力を発揮できる機会・挑戦となるようにと、この企画に取り組んできました。その結果、出店数も去年の倍の28店舗と増え、去年とは違った新たな取組みも多く出てきました。当日は梅雨時期にもかかわらず天気にも恵まれ、来客者も1300人近くに上り、これ

までにない盛り上がりを見せたのではないかと
思っております。

しかし、この看大祭を終えて多くの課題も残りました。この沖縄県立看護大学の学生として、看護を地域にどう還元していくことが出来るのか、大学生として今私達に出来ることは何なのかを学生一人ひとりがもっと真剣に考えていかなければなりません。そうしなければ、沖縄県立看護大学の歴史や伝統となるものを創り上げることは出来ないのではないかと思います。私達は、この機会の一つの企画を行動にし、その行動を形へと残していくことの難しさを学ぶことが出来ました。この学びを次の挑戦への糧とし、さらなる沖縄県立看護大学の発展へとつながるように努力していきたいと思ひます。

学
生
会
の
動
き

学
生
会
の
動
き

教職員の動き



助教授 石橋 朝紀子

沖縄は宝島。飛行機の窓から見下ろす海の色や目をみはるばかりの夕焼けは絶景です。写真家のCDで見た離島の景色は人生始めて見る光景ですし、また、そこに住んでいる人々の表情は生きることを教えているように思えます。これらは沖縄だけではなく地球の財産だと思いました。肉眼で見れば感情失禁が起こることでしょう。沖縄は太陽の国。しかし、私は四季で夏が一番苦手です。理由は夏ばてと皮膚のトラブルです。なぜ沖縄にやってきたのと問う人がいますが私にも分かりません。人生とは不思議なものです。きっと宝を探しに来たのかも知れません。



助手 西平 綾子

沖縄県出身。県内の高校、大学、大学院を卒業した後、平成11年虎ノ門病院（東京）へ就職。平成14年4月より基礎看護学教室の助手として勤務しています。

虎ノ門病院では消化器、泌尿器科疾患を主とした混合病棟で勤務していました。そこではストーマ等消化器外科看護に加え、癌や血液・腹膜透析等の慢性期看護も経験しています。

赴任した際に感じたことは「勢い」です。今年で完成年度を迎えることも理由だと思いますが、地域のニーズも高く活動の場が豊富にあることも理由ではないかと思えます。私もその流れに乗れるよう、日々励んでいます。

趣味は音楽特に沖縄三線です。5年前から習い始め、とりこになりました。工工四（楽譜）は読めるのですが、ちんだみ（調律）ができないため、自宅の三線はインテリアになりつつあります。今後時間を作って再開をしたいと考えています。興味のある方は是非声をかけてください。



助手 宮城 裕子

新しい環境の中で新たな経験が多く戸惑いもありますが、活発な学生、教職員の先生方の中で毎日が新鮮な気持ちです。4月から大学教育に携わることになり、病院の現場とはまた違った緊張感で気の引き締まる思いです。

3月まで県立中部病院の脳外科病棟に3年間勤務していました。現場での経験、感じたことを看護、実習、研究に活かし取り組んでいきたいと思えます。約1年半米国で学ぶ機会があり、その時をきっかけに国際的な医療に関心をもっていました。この大学の国際保健看護の領域で助手として看護に携わっていく機会を与えられたことに感謝し、これから体験した実践を活かしながら文化の異なる人々の背景を理解し、国際的な視点から保健看護に取り組んでいきたいと考えています。日々の経験を大切に努力していきたいと思えますので、ご助言、ご鞭撻を宜しくお願い致します。

編集後記

創刊号の基本的な構成を踏襲しつつ紙面を刷新して、第2号をお届けします。

今回の広報誌の紙面づくりには、教育補助嘱託員の上原香さんに労をとっていただきました。表紙の、緑に包まれた大学の写真をはじめ、明るい紙面に仕上がったと思います。広報誌に関するご感想・ご意見を歓迎いたします。

広報情報委員会

沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号

TEL(098)833-8800 FAX(098)833-5133

<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>